

American Rock Lyric Landscape

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケープ—

ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジヨージ・カックル

イラストレーション=花井祐介

第2回

アメリカのスピリット、
ロード・ソングの代表曲

Little Feat 'Willin'



Little Feat "Little Feat"
リトル・フィート『ファースト』
Warner Bros. ●WS1890 [1971]
➔ワーナー ©WPCR12613

それだけでなく、もともとアメリカ人は自由を求めてどこからか旅してきた人々だ。アメリカ人には旅に自由を求める血が流れている。日本人にわびさびのスピリットがあるように、アメリカ人の根底にインプットされているものなんだ。

今回はそんな旅から生まれた曲、ロード・ソングの代表ともいわれる曲の紹介をしよう。日本でもアメリカン・ロック好きな人必ずや知っているだろう、「ウィイリン (Willin)」だ。

この曲はリトル・フィートのロウエル・ジョージが1970年に書いたもの。71年にレコーディングしたファースト・アルバムに入っているものの、ロウエル自身が怪我をしてしまい、実はファースト・アルバムでは本人がスライド・ギターを弾いていない。なんとプラモデルを作っていたときに、手を怪我してスライド・ギターを弾けなかったんだ。それでファースト・アルバムは違うギタリストを使い、彼はガラガラ声で歌声を披露している。僕はその渋く、だらしのない感じが好きんだけど、ロウエル・ジョージはそれを悔やんだのかも。セカンド・アルバムを作る際に

列車や車での移動中、時間を見つけては曲を書き続けていたのだろう。詩のテーマなら、いくらでもある。夢、郷里のこと、自然……街で出会った彼女、地元で自分を待っている彼女、次はいつ会えるかわからないワン・ナイト・スタンドの女……という具合に。もちろんその時代はミュージシャンだけでなく、普通の人々も皆、仕事をもとめて旅をしていたけど。

その昔、アメリカ南部のブルースマンはニューヨークやシカゴを目指して旅をした。テキサスやオクラホマのミュージシャンは西に向かつて。そして旅をしながら、彼らはいつも行き当たりばったりでライブをしていた。生活そのものが旅で、音楽活動だった。

そんなだから、どんなミュージシャンにも旅の曲は多い。街から街へ移動する間、

雨に濡れ、自分は木のようによじれたと最初の1行にある。この話はどこかの本で読んだんだが、それはまるで雨に濡れたロッキングチェアのようによじれた感じを表現したかったとロウエルは言っている。そして雪に追われて走り続け、飲んでいて汚い上に、彼は何日もシャワーを浴びてない。それでもまだ諦めないといっているんだ。

Oh out on the road, late at night

I seen my pretty Alice in every headlight

Alice, Dallas Alice

旅をしていると、誰でも昔の彼女のことや温かいベッドのことを思い出すものだ。彼はダラスという街においてきたアリスという女のことを頭をよぎる。彼はヘッドライトを見るたびに、彼女のことを思い出すんだ。

そしてダラスといえば、テキサスだ。なぜテキサスか、それはワイルド感と自由を連想させ、強い男のイメージと重ね合わせるためだ。ひいては、そのままカウボーイのイメージだ。昔、アメリカのカウボーイは、高原に放し飼いされている牛を馬で集

め、鉄道の街や屠殺場のあるところまで連れていく仕事をしていた。トラック運転手はそんなカウボーイと同じような感覚の仕事をしている。とりわけ、この運転手はそうだ。

カウボーイはロマンがあるイメージだが、実際は天気左右される仕事で、過酷だ。死ぬ人も多い。その一方で、昔のアメリカの子供は、小さいときからカウボーイは格好いと思っていたんだ。今も、かもしれない。

I've been from Tucson to Tucumcari

Tehachapi to Tonopah

Driven every kind of rig

That's ever been made

Now drivin' the back roads

So I won't get weighed

And if you give me weed,

Whites and wine

And you show me a sign

I'll be willin'

To be movin'

サビでは4か所の街の名前が出てくる。

「ウィイリン」を再度ピックアップし、コーラスなどを入れて、きれいなプロダクションで録り直したんだ。同じ曲とは思えないほどまろやかな印象で、ラジオでかきりそうな一般受けする仕上がりになっている。この曲はアメリカでもヒットはしなかったけど、トラックの運転手の世界では今でも愛され続けている名曲だ。ちなみに1枚目のアルバムは1万1千枚しか売れなかったらしい。でも実際はザ・バーズやリンダ・ロンシュタット、ウィリー・ネルソンまでカヴァーしているんだから、紛れもなく名曲だろう。

この曲は西部を走る長距離トラックの運転手を描いている。でもただのトラック運転手じゃない。イリーガルのドライヴァーというところが時代を反映し、いい味を出しているんだ。

I've been warped by the rain

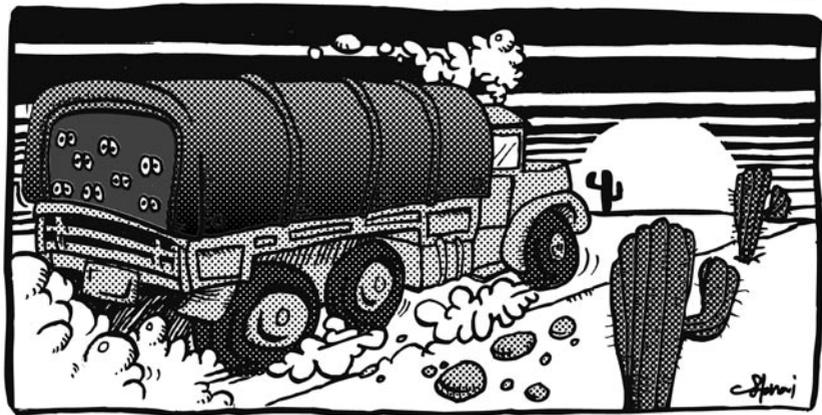
Driven by the snow

I'm drunk and dirty

Don't you know?

And I'm still

Oh I'm still



アリゾナ州のツーソン、ニューメキシコ州のトゥーカムカリ、カリフォルニア州のテハチャピー、ネバタ州のトナパー。すべてTではじまる西部の砂漠の街で、すべてネイティブ・アメリカンの言葉だ。僕も行ったことがあるが、本当に何もなしの砂漠のなかにボツンと灯りが見えるような街、やつとオアシスにたどり着いたような印象だった。それも4か所とも違う州にある。スケールの大きさを印象づけるかのような詩なんだ。

「weed」とはトラックの車種のこと。すべての車種を運転していると自慢しているから、ヴェテランの運転手ということになるだろう。そして彼は荷物を積みすぎているのと、イリーガルなものを持っているから、トラックの積載量をはかれないように、裏道を走り続ける。道路で決められた基準をオーヴァーしていれば、もし見つかった場合、荷物を降ろさされてしまうからだ。罰金もとられるしね。

彼はマリファナとスピードとワインがあれば、どこへでも行くという。実は詩に出てくる「weed」はマリファナ、「whites」はスピードのことだ。

Now I've smuggled some smokes
And folks from Mexico
Baked by the sun
Almost every time I go to Mexico
And I'm willin'.

アウトローはロマンティックなイメージだ。70年代のアメリカでは、いいマリファナはメキシコから運ばれてきていた。エリア別に名前もついていた。ワインみたいな感じだね。

アメリカ人にとってのメキシコとは、マリファナと農業やレストランの労働者のイメージだった。メキシコ人はいい生活をするために、アメリカに来ていた。でもイリーガルだから、捕まったら返されていたんだ。それとは別に、違う意味でマリファナはアメリカ人に夢を与えていた。このトラック運転手は「smokes and folks from Mexico」。つまりマリファナとメキシコ人に乗せ、ふたつの違う夢を抱えるようにしてメキシコとアメリカを行き来していたことになる。そもそもカリフォルニアやアリゾナ、ニューメキシコ、テキサスに住む若者たちはよくメキシコに行つて遊んでいた

ものだ。この詩を書いたロウエル・ジョージもそうだ。

僕もサーフィンをしにメキシコへ行った。アメリカでは21歳になるまでアルコールを飲めないが、メキシコにはそんな法律はないし、若者にとつても夢のような場所だったんだ。

残念ながら、今はドラッグ・ギャンブルの戦場になってしまひ、国境のそばの街は危なくて行かれなくなつてしまつたが。

And I've been kicked by the wind
Robbed by the sleet
Had my head stoved in
But I'm still on my feet
And I'm willin'
Oh I'm willin'

彼はどんなに叩きのめされても、俺はやる気しているとたくましい言葉を放つ。蹴られて、盗まれて、頭を踏まれても、俺はまだ立ってるぜつてね。天気にととえていりけど、これは誰に何をされてもということなんだ。

ちなみにセカンド・アルバムのヴァージ

ョンでは、詩の最初の2行を最後に持つてきている。ざつとこのほうが流れる的に自然になつて思つたんだろうと僕は解釈している。

I've been from Tucson to Tucumcari
Tehachapi to Tonopah
Driven every kind of rig
That's ever been made
Now drivin' the back roads
So I won't get weighed
And if you give me weed,
Whites and wine
And you show me a sign
I'll be willin'
To be movin'

最後はサビのリビートで終わる。

ロウエル・ジョージが生きていた間は3ヴァージオンしかレコーディングされていなかったが、79年に亡くなつてからはさまざまなミュージシャンがカバーし、リトル・フィートのヴ

アージョンも数多く出ている。

旅の歌「Road Song」は、アメリカのロックの世界ではトラディショナルだ。たとえ自分で旅ができなくても、旅の曲を聞いて心の中で旅をする。そして昔の彼女のことを思い出して、現実から夢の世界へもう一度戻るんだ。

今はもう、こんなふうには旅に出られるアウトローは、ミュージシャンからトラック・ドライバーしかいないだろう。もしアメリカを旅する機会があったら、この曲を車で流しながら、四つの街へ辿つてみたらどうだろう。砂漠の街から街へ、きつとカウボーイたちの過酷な、でも夢のある足跡を感じる事ができるだろう。僕は夢だったトラック運転手の気持ちになれて、非日常を感じることができたよ。昔の彼女の幻影には出会えなかったけど(笑)。



ジョージ・カックル / GEORGE COCKLE
ラジオ・パーソナリティ。
1956年、鎌倉生まれ。
18歳で新宿2丁目のロック・バー<開拓地>で、音楽の世界にのめり込む。ハワイアンなどのCDをプロデュースする傍ら、インターFMでは音楽番組「レイジーサンデー」のパーソナリティをつとめ、音楽通ぶりを披露。さらにサーフ・イベントなどのMCでも活躍。
<http://whatsupmusic.inc.com>